

過年度決算における健全化判断比率の修正について

参考資料 1-3

財 政 局

1. 過年度決算における実質公債費比率及び将来負担比率の修正について

「地方公共団体の財政の健全化に関する法律」に基づき算定した健全化比率のうち、実質公債費比率及び将来負担比率について、下記のとおり修正いたします。

決算年度	実質公債費比率		将来負担比率	
	修正前	修正後	修正前	修正後
平成 29 年度	—	—	101.1%	<u>102.2%</u>
平成 30 年度	—	—	85.5%	<u>87.2%</u>
令和元年度	6.1%	<u>6.2%</u>	78.8%	<u>80.5%</u>
令和 2 年度	6.1%	<u>6.2%</u>	71.2%	<u>72.8%</u>
令和 3 年度	—	—	59.1%	<u>60.2%</u>

2. 修正理由

実質公債費比率及び将来負担比率の算定基礎数値について、誤りがあることが判明したことから、各比率の再算定を行った結果、過年度の実質公債費比率及び将来負担比率の修正が必要となったものです。

3. 実質公債費比率の概要及び修正内容

(1) 概要

「公債費、企業債元利償還金充当の一般会計繰出金などの合計額」の、標準財政規模に対する割合（公債費等へ充当される特定財源、地方交付税で措置される部分を除く）の、過去3ヵ年分の平均値

単年度
$\frac{(\text{地方債の元利償還金} + \text{準元利償還金}) - (\text{特定財源} + \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}$
過去3ヵ年平均
$\frac{(\text{N-2年度}) + (\text{N-1年度}) + (\text{N年度})}{3\text{ヵ年}}$
※過去3ヵ年平均の算定にあたっては、小数点以下第2位までの単年度数値を掲載しておりますが、 実際は第3位以降の数値を含めて算定しております。

- ・ 準元利償還金：次のイからホまでの合計額
 - イ 満期一括償還地方債について、償還期間を30年とする元金均等年賦償還とした場合における1年当たりの元金償還金相当額
 - ロ 一般会計等から一般会計等以外の特別会計への繰出金のうち、公営企業債の償還の財源に充てたと認められるもの
 - ハ 組合・地方開発事業団（組合等）への負担金・補助金のうち、組合等が起こした地方債の償還の財源に充てたと認められるもの
 - ニ 債務負担行為に基づく支出のうち公債費に準ずるもの
 - ホ 一時借入金の利子

(2) 修正内容

<令和元年度>

① 修正前

元年度決算(単年度)
$\frac{(\text{地方債の元利償還金} + \text{準元利償還金}) - (\text{特定財源} + \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}$
$= \frac{(33,937,594\text{千円} + 33,003,139\text{千円}) - (17,428,618\text{千円} + 33,990,168\text{千円})}{276,061,307\text{千円} - 33,990,168\text{千円}} = 6.41\%$
過去3カ年平均
$\frac{(\text{29年度}) + (\text{30年度}) + (\text{元年度})}{3\text{カ年}} = \frac{6.04 + 6.01 + 6.41}{3} = 6.1\% \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$



② 修正後

元年度決算(単年度)
$\frac{(\text{地方債の元利償還金} + \text{準元利償還金}) - (\text{特定財源} + \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}$
$= \frac{(33,937,594\text{千円} + 33,085,092\text{千円}) - (17,416,318\text{千円} + 33,972,157\text{千円})}{276,061,307\text{千円} - 33,972,157\text{千円}} = 6.45\%$
過去3カ年平均
$\frac{(\text{29年度}) + (\text{30年度}) + (\text{元年度})}{3\text{カ年}} = \frac{6.08 + 6.06 + 6.45}{3} = 6.2\% \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$

<令和2年度>

① 修正前

2年度決算(単年度)
$\frac{(\text{地方債の元利償還金} + \text{準元利償還金}) - (\text{特定財源} + \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}$ $= \frac{(33,402,696\text{千円} + 32,788,456\text{千円}) - (18,316,864\text{千円} + 32,816,806\text{千円})}{280,307,561\text{千円} - 32,816,806\text{千円}} = 6.08\%$
過去3ヵ年平均
$\frac{(\text{30年度}) + (\text{元年度}) + (\text{2年度})}{3\text{ヵ年}} = \frac{6.01 + 6.41 + 6.08}{3} = 6.1\% \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$



② 修正後

2年度決算(単年度)
$\frac{(\text{地方債の元利償還金} + \text{準元利償還金}) - (\text{特定財源} + \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}$ $= \frac{(33,402,696\text{千円} + 32,882,426\text{千円}) - (18,314,897\text{千円} + 32,814,191\text{千円})}{280,307,561\text{千円} - 32,814,191\text{千円}} = 6.12\%$
過去3ヵ年平均
$\frac{(\text{30年度}) + (\text{元年度}) + (\text{2年度})}{3\text{ヵ年}} = \frac{6.06 + 6.45 + 6.12}{3} = 6.2\% \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$

4. 将来負担比率の概要及び修正内容

(1) 概要

「市債残高、一般会計繰出金の充当が見込まれる企業債残高、第三セクター等への損失補償債務に係る負担見込額などの合計額」の、標準財政規模に対する割合。

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}$$

- ・ 将来負担額 : 次のイからチまでの合計額
 - イ 一般会計等の年度末における地方債現在高
 - ロ 債務負担行為に基づく支出予定額（地方財政法第5条各号の経費等に係るもの）
 - ハ 一般会計等以外の会計の地方債の元金償還に充てる一般会計等からの負担等見込額
 - ニ 当該団体が加入する組合等の地方債の元金償還に充てる当該団体からの負担等見込額
 - ホ 退職手当支給予定額（全職員に対する期末要支給額）のうち、一般会計等の負担見込額
 - ヘ 地方公共団体が設立した一定の法人の負債の額、その者のために債務を負担している場合の当該債務の額のうち、当該法人等の財務・経営状況を勘案した一般会計等の負担見込額
 - ト 連結実質赤字額
 - チ 組合等の連結実質赤字額相当額のうち一般会計等の負担見込額
- ・ 充当可能基金額 : イからへまでの償還額に充てることのできる地方自治法第241条の基金

(2) 修正内容

<平成29年度>

① 修正前

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,099,934,395 \text{千円} - (229,665,887 \text{千円} + 131,054,106 \text{千円} + 497,820,654 \text{千円})}{274,096,100 \text{千円} - 35,491,300 \text{千円}} = \underline{\underline{101.1\%}} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$



② 修正後

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,104,217,260 \text{千円} - (229,665,887 \text{千円} + 132,734,081 \text{千円} + 497,820,654 \text{千円})}{274,096,100 \text{千円} - 35,473,068 \text{千円}} = \underline{\underline{102.2\%}} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$

<平成30年度>

① 修正前

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,088,404,343 \text{千円} - (238,791,260 \text{千円} + 132,840,063 \text{千円} + 510,031,702 \text{千円})}{276,712,919 \text{千円} - 35,157,417 \text{千円}} = \mathbf{85.5\%} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$



② 修正後

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,095,741,139 \text{千円} - (238,791,260 \text{千円} + 136,247,448 \text{千円} + 510,031,702 \text{千円})}{276,712,919 \text{千円} - 35,141,532 \text{千円}} = \mathbf{87.2\%} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$

<令和元年度>

① 修正前

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,069,063,755 \text{千円} - (235,600,253 \text{千円} + 134,177,257 \text{千円} + 508,473,501 \text{千円})}{276,061,307 \text{千円} - 33,990,168 \text{千円}} = \underline{\underline{78.8\%}} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$



② 修正後

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,078,377,279 \text{千円} - (235,600,253 \text{千円} + 139,379,615 \text{千円} + 508,473,501 \text{千円})}{276,061,307 \text{千円} - 33,972,157 \text{千円}} = \underline{\underline{80.5\%}} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$

<令和2年度>

① 修正前

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,062,533,998 \text{千円} - (241,766,285 \text{千円} + 136,521,719 \text{千円} + 507,886,176 \text{千円})}{280,307,561 \text{千円} - 32,816,806 \text{千円}} = \mathbf{71.2\%} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$



② 修正後

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,070,908,360 \text{千円} - (241,766,285 \text{千円} + 141,075,381 \text{千円} + 507,886,176 \text{千円})}{280,307,561 \text{千円} - 32,814,191 \text{千円}} = \mathbf{72.8\%} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$

<令和3年度>

① 修正前

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,060,329,614 \text{千円} - (257,297,255 \text{千円} + 136,726,450 \text{千円} + 511,197,869 \text{千円})}{294,579,716 \text{千円} - 32,563,086 \text{千円}} = \underline{\underline{59.1\%}} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$



② 修正後

$$\frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})} = \frac{1,066,357,936 \text{千円} - (257,297,255 \text{千円} + 140,036,277 \text{千円} + 511,197,869 \text{千円})}{294,579,716 \text{千円} - 32,581,761 \text{千円}} = \underline{\underline{60.2\%}} \text{ (小数第1位未満切り捨て)}$$

